

昨年後半はイタリアの歌に傾いたので、フッと反省して年末にシャンソン・フランセーズを2曲訳し、それに伴ってポロポロと頭に浮かんだ文章を書いた。

だが、それでも懲りずに今年目覚めた私の頭にポッと浮かんだのは何故か「アドリアーノ・バンキエーリ」という名前。それからオペラ『メデア』の舞台衣裳だった。イタリアのデザイナーがどういう思いでデザインしたかはわからないが、イヤソンの衣裳は神官を、使者の衣裳は武士の着物と袴を連想させた。そして色使い—それは私の好きなゴールドと白、プルシャン・ブルーとシルバーの組み合わせだった。

さて、私は東京メトロのホーム・ドアができた時、金と白の組み合わせに思わず微笑んだ。「銀と白じゃなくてよかった！」私は上品な金色と乳白色が好きである。一概に金色といってもホワイト・ゴールド、ピンク・ゴールド、ルネサンス・ゴールド等様々であるが、明度によって「品のない浮ついた金・華やかな金・上品な金・落ち着いた渋い金」に分かれる。白もシルバーホワイト、ジンクホワイト、パールホワイト、乳白色等様々だ。他の色にしても同様である。私はオレンジ色も好きなのだが、衣服において明るすぎるオレンジは少々品を欠き、煉瓦系に近いくらいが上品だ。青や緑の明度も様々。黒とて決して一種類ではない。赤もピンク系に近いものから沈んだもの、紫も赤に近いものから青に近いもの、例を出せばキリがない。そういった意味でイタリアの色は明るい純色に微妙な落ち着きを加えているし、フランスの色は純色を溶かしてうまくぼかしている。それはエスプレッソとフレンチ・コーヒーのようだ。衣裳の色はその人のセンスだから、それを着る人の個性と品性を表すと思う。

そこでシャンソン・フランセーズを思い出せば、ジュリエット・グレコの身を覆う黒、バルバラの大胆なスリットの黒は印象的である。特に大胆なスリットから覗くものは美しくなければ下品である。今は亡き石井好子さんは足がきれいだと評判であったが、そのようにスリットから覗く脚および足さばきは美しくなければならない。ガニマタであってはならない。そして何よりもシンプルな衣装を引き立たせるものは姿勢の良さである。この「姿勢」であるが、シャンソン・フランセーズの場合、何故かシンミリ歌うものだという印象が強いせいか猫背で登場する人が圧倒的に多いので、歌う前にうらぶれた印象を与えてしまうことが多いように思う。したがっていくら衣裳の色彩を華やかにしたところで決して上品には見えないのである。

さらにシャンソン・フランセーズは黒のイメージだからといって、デザインに凝ったとしても舞台全部が黒一色では寂しいので、歌のイメージに合わせて他人より目立つために様々な色が登場するのだろうが、色の組み合わせが問題である。いっそのこと同系色ははずして乳白色の衣裳にルネサンス・ゴールドのアクセサリーはいかがだろうか？黒の衣裳にシルバー系はいかがだろうか？吊るしでも手に入る色かと思う。最もジュリエット・グレコやバルバラにおいてはアクセサリーさえ不要だ。それから華やかさを出すためのエリマキトカゲのようなシフォンも chiffon(絹 or 雑巾)どちらの意味になるか心配である。何を隠そう私はこのピエロカラーと呼ばれる襟のブラウスを持っているが、襟は高さ次第で印象が決まる。ゴージャスか上品か貧相か下品か。その他チョーカーか犬の首輪か、スカーフか風呂敷か。シャンソン・フランセーズは街の歌であるから、センスさえよければシャツ&パンツでも充分だと思う。(2013.1.1)